

湖と生きる

若い僧たちがあこがれる存在を目指す

千日回峰行を達成した

かまほり
釜堀

こうげん
浩元さん

聞き手・植田 耕司
写真・長井 泰彦



比叡山山中を通算一千日回峰する比叡山延暦寺に伝わる荒行・千日回峰行をさる9月18日、延暦寺一山の善住院住職、釜堀浩元さん(43)が達成した。戦後14人目。多年にわたり、百、二百日ずつ行を重ね、死をも覚悟するという難行を終えたものの、引き続き、比叡山に籠もる「十二年籠山行」に挑戦している。その行のかたわら、12月1日から回峰行の本拠地・比叡山無動寺の本堂・明王堂の輪番として後進の育成に当たっておられる釜堀さんに話を聞いた。

比叡山の千日回峰行は、延暦寺一山の住職になるまでに一日七里半(約30^キ)を歩く初百日を済ませているので、百一日目から始まる。釜堀さんの場合は平成23年に行に入り、平成24、25、26年と各百日、平成27年に二百日を終えた後、無動寺明王堂に9日間籠もり、断食、断水、不眠、不臥の「堂入り」を達成した。平成28年に京都・赤山禅院まで足を伸ばす赤山苦行(約60^キ)を百日、そして平成29年に「京都大廻り」(約84^キ)を百日の後、もとの七里半のコースに戻り、百日を終えて9月18日、無事に満行を迎えた。



—まず、回峰行を達成された時の

感想からお願います。

「皆さんと同じ、誰でも同じひと苦勞を終えたときの気持ちと同じですよ。」

百日、百日と一歩ずつ突破していった結果、千日に到達できたのだと思います。百日を終える都度、反省したことを翌年に活かしたい、と思うこともありました。今は、歴史ある行に汚点を作らなくて良かったな、と思うと同時に、満行させていただいて本当にありがたい、と思っっています」

■ 3人の阿闍梨様

—福岡県出身とお聞きしていますが、どうして

比叡山延暦寺に来られるようになったのですか。

「高校を卒業後、父から『比叡山で修行や勉強をしてみないか』と声をかけられたのがきっかけです。平成5年に紹介を受けて（大津市）坂本の律院に小僧として修行に入り、そこから僧侶の学校・叡山学院に通うことになりました。その律院におられたのが千日回峰行者だった最初の阿闍梨、叡南俊照師なのです。」

律院で数年お世話になり、今度は（比叡）山を越えた京都市左京区にある赤山禅院に移り、そこから坂本まで通う生活に変わりました。赤山禅院におられたのが、叡南俊照師の師僧に当たる千日回峰行者、叡南覚照師で、2人目の阿闍梨との出会いになりました。ところで、叡山学院には4年間お世話になり、天台の僧としての基本や法要全般について勉強をさせていただきました。小僧仲間には千日回峰行をしたいという人がほかにもいましたが、師僧らの背中を見ながらとはいえ、そのころの私にとっては、まだ雲の上の存在でした」

「そのうちに師僧がされたことをしてみたいというあこがれの気持ちがあわてきました。それが平成13年にさせていただいた百日回峰行です。」

百日回峰行には二つの入り方がありま

す。一つは延暦寺一山の住職になるための

『三年籠山行』の3年目にする回峰行、もう一つは地方出身者で一定の資格を持った者に許される回峰行で、私の場合がそうでした。そして百日回峰行を満行したあと、毎夏、（大津市）葛川で行われる夏の修行『夏安居』もさせていただきました。葛川は回峰行を創始した相応和尚がお籠もりされて不動明王を感得された地で、それを追体験させていただいて本当に清らかな気持ちになりました。」

葛川を終えた後、無動寺に戻り、明王堂でお勤めさせていただいたのですが、そこで3人目の阿闍梨、明王堂輪番をされていた千日回峰行者の上原行照師の指導を受けることができました。

千日回峰行を達成した3人の大行満大阿闍梨様にお仕えることができ、大変ありがたい教えを受けたと思います」

■ 走るな、という教え

釜掘さんはその後、比叡山に残ることを決意し、平成17年に延暦寺一山の住職になるために正式に「三年籠山行」に入った。

「地方出身で延暦寺に入れるとは思ってい



ませんでした。修行を積み重ねた結果、その覚悟ができたということだと思えます」と振り返る。三年籠山行は、主に伝教大師の御廟所である浄土院でお大師に仕える僧・侍真が献膳するお手伝いをしたり、在家のための研修道場・居士林や僧侶の修行の場・行院で指導のお手伝いをしたりすることだった。おおまかに言えば、自分の心身を磨くという修行だった。

その結果、平成20年に遂行し、善住院住職を拜命し、師僧の寺・無動寺の玉照院に入り、留守を守るとともにさらに修行を重ねた。

そして師僧の許しを得て千日回峰行の願書を提出。平成23年1月、先達会議で許可が下り、2月に延暦寺の一山会議で認めら

れた。

3月1日から籠山に入り、3月20日から前行をし、28日から千日回峰の行に入ったのだ。

——回峰行は『死を覚悟する行』と言われて
います。相当の覚悟と決意をして臨ま
れたいですね。

「いえ、ただ行が始まった、と思っただけではよ。

死とか病気で倒れたら、とか迷いがあればやっていません。先達もされておられるのだし、最大の難関である『堂入り』も9日間たったら皆さん、出て来られています。一日一日を着日に歩んでいけば必ず達成できると信じていました。回峰中に思っていたのは、その日その日を全力ですること、余力を残そうと思うとだめですね。

行に入る前に、師僧に言われたのは『走るな』と『(午前)7時に坂本を歩くこと』でした。走るな、ということとは時間を気にするなということ。また、午前2時半頃、出発し、七里半を普通に歩いて5時半頃で戻って来ることができると、早く回ろうとすればもっと早く戻って来ることが出来ます。でも、比叡山の麓坂本では、



門前のたたずまい

信者さんが(私の)数珠を受けようと待ち受けておられるのです。早く通過すると、それができなくなってしまう。それを終えて最後の無動寺の坂を上るとちょうど戻るのが8時頃になる、そんな毎日の繰り返しです」

■回峰行は一期一会

「回峰行をしていて思ったのは、山は毎日、前日とは違う顔を見せてくれるということです。朝日がきれいだったり、雲海が

出ていたり。歩いていて『一期一会』ということを胸に刻みました。

3、4月はまだ寒くて雪が降るし、横川では遅くまで雪が残っています。春から夏にかけては新緑がきれいだし、笹ユリが咲いています。秋になると夏は暑かったなあとか。毎日が新鮮でしたね。

動物ともよく出会います。最近はリスが多いような気がします。

夜は京都の夜景がきれいですね。満月の夜は、手に持つちようちんより明るい気がします。わらじを締め直そうとする時、月の影が暗くて足下が見にくい時があります。

自然界を歩きながら、二六〇カ所か二七〇カ所で礼拝するのですが、山川草木が一体化しているような気持ちになっていましたね」

—まだ、「十二年籠山行」中だと聞いていますが、最後に、新年を迎えるに当たっての抱負をお聞かせください。

「相応和尚の一千百年御遠忌の年（平成29年）に修行を達成させてもらえた喜びを今、かみしめています。籠山行はまだ満行まで5年半残っており、明王堂のお不動さ

んに朝から晩までしつかりと仕えて自分を磨きたいと思います。

師僧にあこがれて千日回峰行をさせていただいた訳ですが、これからは若い僧たちがあこがれるような存在になりたい。輪番として明王堂を守り、若い僧を育てる。与えられた職務を精一杯やっています」



撮影はいずれも無動寺玉照院で

回峰行のわらじ